

昭和49年2月1日第1種郵便物認可
平成17年3月1日発行（毎月1回1日発行）
俳句雑誌 沖 第36巻第3号

俳句雑誌「おき」

3月号



沖
発行所

風そよろ

林 翔

九十歳たるを噛みしめ年迎ふ

雪は止み二日の朝の御来光

思はざり息がかくまで白しとは

底冷えのわがものならぬ足とかな

桂信子さんを悼む

十二月十六日桂信子さん逝去の報は大きなショックだった。と言っても私が桂さんと親しかったわけではない。師系も全然違うし、桂さんは関西に住み、私は関東に住んでいるから、桂さんが受賞式とか、何かの大会とかで、たまたま上京された時に会う程度である。

では何故ショックだったのかと言えば、同じ大正三年生まれだからということだろう。数えどしならば、「おないどし」ということ。しかし詳しく言えば、私は一月生まれで、桂さんは十一月生まれ、私のほうがほんのちよつとお兄さんということになる。

と言っても、句歴は桂さんのほうが長い。私はまだ「馬酔木」で一句級だった昭和十六年、桂さんは既に「旗艦」（日野草城主宰）の同人に推されていたのだった。「草苑」を創刊し、主宰となられたのは、昭和

消ゆるため降る雪あはれ下総野

一月十四日、寒中なれど

今日よりを春とや言はむ風そよろ

大いなる冬芽何ぞやああ辛夷

一月二十四日、九十一歳

卒寿以後ひととせ過ぎぬ寒椿

寄り添うて囁く花やシクラメン

無精髭なぞる指さへあたたかし

四十五年、五十五歳の時であった。桂信子第一句集『月光抄』が出版されたのは昭和二十四年であるが、中でも、

ゆるやかに着てひとと逢ふ螢の夜
やはらかき身を月光の中に容れ
は名句中の名句である。螢の夜の句は箕面の勝尾寺境内に句碑となっている由。

私がショックを受けた理由の一つには、総合誌「俳句研究」「俳句」のそれぞれ一月号に新年の句を載せておられるのに、十二月に亡くなってしまわれたこと、それもある。元日やまだ半年は死ぬませぬは、「俳句」一月号の句であった。

林 翔



かまくら

能村 研三

編集部の旅

「慰安旅行」という言葉は、現代にはおおよそ似つかわしくない言葉になってしまったが、なつかしくもある。

仕事の上司や仲間と、休みの時まで一緒に旅行をしなくても良いと思つた時代もあったが、時間の調整が出来る限りなるべく参加することにしてきた。

しかし、最近の職場では合理的、個人主義的な考え方が大勢を占めるようになって、旅行積立もなくなり、職場の仲間と貸切バスに乗って、温泉旅館で宴会をするなどという考えは全く無くなった。

上に立つものとしては何か寂しいものがあるが、時代の趨勢と考えると仕方がないことも知れない。

現在の職場は、交代勤務もあつて一緒に休みをとれないが、せめて休館日に日帰りで、美術館などを巡るツアーを企画しても、限られた有志しか集まらない。

しかし沖の編集部には、その習慣が残っていて、毎年比較的時間に余裕のある二月に行なうようにしている。私も誘いを受ければ都合のつく

年来る地球のやまひ癒されよ

潮砕く巖に咲かす波の華

池普請鯉一匹を胸抱へ

横手七句

かまくらの籠り灯りの燭度かな

小かまくらの千の祈りを灯しをり

釜伏せの願ひを灯す小かまくら

水道課のかまくらに来て「はいったんせ」

かまくらに賽銭はづむ濡れ紙幣

かまくらの中に水神様の屋根

「鳥追」といふ名四角き雪の室

限り参加することになっている。

昨年は富山県氷見の「寒鯛ツアー」
一昨年は、館山支部の遠藤真砂明さんのお世話で房州へ、かつては北川英子さんが編集長時代に韓国へ旅行したこともあった。

沖の人たちとは、勉強会、同人研修会や地方大会など、旅行する機会は他にもたくさんある。編集部旅行は、句会などの時間を設けず、自由に散策しながら親睦を深めるいわゆる「慰安旅行」的な旅であるが、俳人精神が備わっている編集部員だけあって、帰ってきてからの作品の出来もすばらしい。

今年は、昨年の横手で行なった東北大会がきっかけで、池田崇さんのお世話で、二月十五日からの「かまくら」と梵天祭りを見ることができた。この場でお礼申し上げたい。

編集部は三十五周年記念号の編集を控え、これからは忙しくなるが、東北の雪景色の中で束の間の休息をとることができた。

能村研三



蒼茫集



遠く来し

北川英子

比良は父比叡は母よ眠りたる
みんな斜に構へ羽子板らの視線
なほ北へ乗り継ぐ暮色雪ぼたる
雪原に星拾ふまで遠く来し
群るる中ひたすらに舞ふ鶴一對
すすり泣くかに凍てきれぬ滝こだま

山彦

大畑善昭

なほ奥に一泉のありわが枯野
切干や山彦もすぐそばにゐて
祖父として付き合はさるる櫓遊び
羅漢より誘はれ笑ひ初笑ひ
元日の是非なき訃音ありにけり
賑やかや寒禽が木に鈴生りに

おしくらまんぢゅう

千田百里

置いて来し恋ほど冬のからす瓜
くつさめの過ぎゆく還らざる刻も
分け入つてみるだけの枯芒原
屠蘇酔ひの夢や鳥羽絵に紛れ込み
おしくらまんぢゅう教へて弾き出されしよ
初茜聖地を奪ひ合ふなかれ

文楽の初日

都筑智子

遠富士にむらさき紡ぐ初霞
初明り今日の命は父母越えて
初夢の後姿にこだはりぬ
誘はれて恵方詣の階高し
すずしろのまみどり恃む七日粥
文楽の初日を待てる春小袖

潮鳴集



針 供 養 長 岡 新 一

氷柱より滴りさうに空の青
ゆすりたる水の重さや紙を漉く
探りをる鞆のなかの十二月
冬芝や木はみな幹をもちて立つ
国境は地球の縫ひ日針供養

初 景 色 徳 植 よ う 子

かもめなど数へてをりぬ初景色
青空へ子を抱きあげて破魔矢受く
紅刷きて違ふまなざし初鏡
目つむりて無欲の初湯あふれさす
人形町の鯛焼として尾を張れり

冬 紅 葉 大 庭 三 千 枝

冬紅葉日の寵一人じめにして
振りしぼる朱の一しづく散紅葉

鴨の向き一つに揃ふ初景色
薄紅のはなびら餅の稚気をこそ
折々に死後のことなど去年今年

金 属 音 林 玲 子

参道をまろぶ落葉の金属音
冬館蔓の自縛をのがれ得ず
夕焼けのつひの一滴木守柿
日溜りに置かれしやうに朴落葉
鮫鱈鍋「なる程」のあと黙ながき

白 き 闇 う ま き い つ こ

海鳴りの腸に沁み河豚汁
霜の夜やふつつ夫を待つシチュー
太棹を撥の責めぬる雪催
餅啜る口中に生る白き闇
酉の絵の布巾をおろす初水仕

沖作品



灯点して聖樹にありぬ木の句

初旅の裏の冷たき磁気切符

干大根星座しづかに座を移す

獵犬が走り硝煙野を這へる

白鳥を咲かせて湖の完結す

数へ日の巨き口開けカーフェリー

重力を射抜くまなこの弓始

明日へ焚く風倒木のさくら櫓

着ぶくれの湿り有袋類めきて

裸木となりきはやかに紅のぼる

さざなみのひかるや鷹の翼鳴る

擦れ違ふ毛皮に鋼の匂して

冬日燦口中にがきエスプレッソ

錫杖を突くたび殖ゆる冬の星

雪兔さみしきことは野へ還し

冬あたたか干潟に百の羽音して

千葉

林 昭太郎

安藤しおん

東京

中尾 公彦

工藤 進

能村研三 選

雪晴や耳濯がれてゐるやうな

綿虫の白き日暮となりにけり

軒氷柱雫なすときささやける

浮寝鳥水に活着せるとし

山彦の機嫌よき日や蒲団干す

松迎へ斜めななめに小舟とめ

跡継も黙を受けつぎ注連作

茫茫と鮫鱗おしが糶られけり

去年今年泣いて笑うて一つ顔

年忘れ君の隣りを択びけり

雪吊の藺縄匂へる雨催ひ

神酒吹いて一喝いれて斧始

親離れ子ばなれ難し切山椒

冬うらら子は変化球返しけり

去年今年月は欠けたるままに在り

元朝や街まで凧ぎて居るごとし

神奈川

菅原 健一

坂 ようこ

石川 笙児

砂時計の砂落つると冬深む
顔のない時間に顔描く初日記
いつときの落日も見ず冬耕す

千葉

鈴掛 穂

蒼穹のまたたきかとも冬ざくら
数へ日のすぐ閉ぢたがる文庫本
どの胸の夕日もうすし浮寝鳥

神奈川

堀口 希望

星冨ゆるギリシャの神をちりばめて
君の掌のぬくみ掌にある冬北斗
数へ日の風にちぎれし世界地図
探梅の果てて一番星の駅

東京

高木 嘉久

新駅の噂ちらほらみそさざい
終の葉を放さぬ梢夜番の柝
冬帽のまだ見えてゐる別れかな
梢火揺れ正論ときに土俵際

市川市

栗原 公子

冬耕や己の影を鋤き込みて
何目指す初夢にわが駈けぬしは
晴着まだ衣桁にかかる松納
艶増せる皮手袋のなじみ皺

千葉

佐々木よし子

星冨ゆる路上ライブのサキソフォン
鶏の樹の上になまる小春かな
配られて夜間飛行の膝毛布
あをあをと門の内なる冬菜畑

市川市

諸岡 和子

荒ぶ日や冬木の瘤が力出す
父老いぬ後ろ前なき毛糸帽
寒に入る円空仏に深き罅

凍て返る小さき四耳持つ白磁壺
米寿てふ脱皮に似たる年迎ふ

静岡

竹原 惣一

老いたれど巨き夢描く初御空
葉隠れに羞ひのあり寒椿
耕牛を追ひて田を鋤く夢はじめ
一条の野川のひかり冬ざるる

長野

内山恵美子

山も木も川も雪なる淑気かな
行きずりに雪の話のローカル線
雨粒のいくつも割れて雪しきり
欄干や鳥になりたき春着の子

奈良

福山 悦子

新人賞予選句 (三月)

灯点して聖樹にありぬ木の句
数へ日の巨き口開けカーフェリー
さざなみのひかるや鷹の翼鳴る
冬あたたか于瀉に百の羽音して
山彦の機嫌よき日や蒲団干す
親離れ子ばなれ難し切山椒
去年今年月は欠けたるままに在り
数へ日のすぐ閉ぢたがる文庫本
星冨ゆるギリシャの神をちりばめて
冬帽のまだ見えてゐる別れかな

林 昭太郎

安藤しおん

中尾 公彦

工藤 進

坂 ようこ

石川 笙児

菅原 健一

鈴掛 穂

堀口 希望

高木 嘉久

沖作品 選後句評

*
能村研三

灯点して聖樹にありぬ木の句 林 昭太郎

俳句を作るには、鋭く磨きあげた五感を活かしたものでなければならぬ。この句も、聖樹に飾りつけられたイルミネーションに灯りが点った瞬間を視覚で捉え、今まで灯りを点さなかった聖樹は何となく寒々しかったものの、灯が点いた時から、何かほっとする暖かさに包まれた。そして、樫の木のもつ句が漂ってきた。最近では、本物の木を使わずに、本物に似せた擬木が使われることが多くなり、それに加えて華美な電飾をほどこした聖樹が多くなってきた、その純粹さが失われつつあることに、やや懸念を感じている一人である。私の家にも、クリスマスツリー用の樫の木があって、十二月になると父が庭から掘りあげ、鉢に植え替えて部屋に毎年飾ってくれた思い出があるが、この句も何か昔の聖樹のなつかしさを覚える句である。もう一句「白鳥を咲かせて湖の完結す」の句、華麗な白鳥が、湖上に花を咲かせるがごとくに羽を広げた瞬間を捉えた句であ

る。

数へ日の巨き口開けカーフェリー 安藤しおん

安藤さんは、個性的な句作りをされるお一人であるが、この句も面白い素材をテーマに俳句にされた。数へ日といえば、何か慌しい街の喧騒を詠ったものが多いが、本土と島を結ぶ、あるいは半島と半島を結び、陸路の混雑した道路を通らず、船運を利用して、距離と時間をショートカットさせるカーフェリーは暮の忙しい時はより効果を発揮する。暮の荷物を積んだトラックを次々に吞み込んでいくカーフェリーの巨きな口は、数え日の慌しさ、焦燥感も呼応して印象的な存在である。もう一句「着ぶくれの湿り有袋類めきて」、この句も、着膨れている自分をカンガルーのような有袋類に例えたのは面白い発想である。

さざなみのひかるや鷹の翼鳴る 中尾 公彦

芭蕉が愛知県の伊良湖岬で詠んだ「鷹一つ見つけてうれし伊良湖崎」という句があるが、冬の荒涼とした海辺で舞う鷹に出くわすことがある。この句も、巻頭の林昭太郎さんと同じように、人間の五感を強く働かせた句である。鷹は冬の陽を受けてゆっくりと天空を舞い、羽を開いた状態で上昇気流を捉え舞い上がってゆく姿は雄大である。冬の海面はさざなみを光らせ、風を受け翼を鳴らす鷹が雄雄しく目に映った。もう一句「擦れ違ふ毛皮に鋼の句して」の句、高級感のある毛皮婦人とするれ違ったのであろうか。気品はあるものの何か鋼のような冷たさを感じた。(以下略)